

インターネットの普及で頭ひっかちになってしまう事ってありますよね～・・・。もちろん、僕の大好きな釣りでもそうです。「あの場所で、あのルアーを使って、こんな風に釣れる！」って・・・やってみて釣れた試しは無いですけど（＾＾；）やはり、その時の風とか月齢とか季節とか・・・色んなモノが関連してそうなる。特別支援もその子の置かれた状況や生活、生い立ち、障害の度合いによってアプローチの仕方も様々ですね。やはり、何事も「鵜呑み」は危険ですね。情報と実体験がリンクした瞬間に身になっていく・・・そういうものだと思います。 久田

第24回『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

☆必要な支援と適切な指導

特別支援教育が始まって、発達障がいということばが広く教育現場に知られるようになってからというもの、学校の先生方が少し窮屈になってきているような感じがするのは私だけではないと思うのですがいかがでしょうか。このように感じるようになってしまっているのはどうしてでしょうか。

インターネットなどの普及は、情報革命をもたらしました。それは、インターネットを使えば、多くの人たちが、これまで知らなかった様々な知識を得ることができるようになったということです。もちろん保護者も例外ではありません。子どもに関する情報を得やすくなっているということなのです。情報は多岐に渡るので、保護者が得た情報をそのまま教師側に伝えてきたときに、それらの情報を知らない場合に、教師が戸惑ってしまうということなのです。

もちろん、自分が担任する子どもの障がいについての知識を得ることは重要なので、それらを得る努力を怠ってはいけません。しかし、ここで理解しておかなければならないことは何かと言うと、保護者が得ている情報や知識は、親として子どもの成長を願い、得たもので、それは、子どもに対する必要な支援についての情報だということです。また、時には偏った情報を得ていることもあるということです。医療機関から得られた情報も同様です。つまり、保護者は教育について訴えてきているのではなく、愛する子どもの成長のために必要な支援を願い、それを訴えているということなのです。情報というものは中立的なものであるもので、それは、どのように活用するかによって、善にも悪にもなるものです。活用次第だということです。保護者が親として、どのように情報を活用しようとしているのかについても、少し配慮する必要があります。頭から否定することができないということです。しかし、受け入れられる情報もあれば、「これはちょっと」と思われることもあるでしょう。困るのは、「これはちょっと」と思われる情報の場合です。この場合は、ひとりで悩まないで、関わっている同僚などに話して共通理解しておくことが大切です。そして、学校として出来ることと、できないことを整理しておくことです。ただ、忘れてはならないことは、保護者は担任の先生を困らせようとしているのではなくて、必要な支援をと考えて情報を得てきた結果だということです。そして、担任として、学校として出来ることできないことを理解して、その上で教師が適切な教育をしていくことが大切だということです。繰り返しますが、適切な教育については、教育の専門家である教師に一任されているということをお忘れではありません。

必要な支援を考える上で、医療機関や、保護者からの情報は重要です。眼鏡にたとえるとするならば、度を合わせるための情報がもらえるということなのです。度を合わせるために必要な情報は何か、参考になる情報は何かということを整理し、必要な支援を考えて、その上で、先生が考える適切な教育をしていくということなのです。

自信をもって教育していこうではありませんか。もちろん謙虚さもあわせ持つことは言うまでもありませんが・・・。そうすれば、特別支援教育に明るい光が射してきます。

坂井聡先生の紹介

（プロフィール）

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞

（著書）

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会）自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など